

2023年1月8日 半田朝礼拝

午前 10時30分

司会 山田紀子

奏楽 大谷京子

前 奏

招 詞

イザヤ書 第44章 21節-22節

讃美歌

讃美歌 21-16-1 (われらの主こそは)

交 読

詩編第8篇 (讃美歌 21 p. 10)

祈 禱

聖 書

エフェソの信徒への手紙 第2章 1~10節

(新約 p. 353)

讃美歌

讃美歌 21-224-1 (われらの神くすしき主よ)

説 教

「わたしたちは神の作品」

「わたしたちは神の作品」。実はこの題は以前わたしたちが使っていた口語訳聖書から取りました。先ほど司会者に読んでいただいた聖書には「わたしたちは神に造られたもの」とあ

りますが、口語訳で「作品」と訳されているのは良い訳だと思  
っています。

「わたしたちは神の作品である」「わたしは神の作品であ  
る」。誰が造ったのでもない。神さまが造ってくださいました。  
しかもこの時に、ただ「わたしたちは神の作品」ではなくて、  
「わたしたちは神の良い作品」と覚えていることがあります。  
新共同訳聖書では「良い」ではなく、「善い」という言葉を使っ  
ていますから、間違えにくいかもしれませんが、わたしは「良  
い」という言葉を使うことも良いのではないかと思っていま  
す。ではどうして「良い作品」と記憶してしまうのか。一つに  
は、神さまが私を造ってくださったときに、そんなにひどい作  
品として造られたはずはない、良い作品として造ってくださっ  
たに違いないと信じているからでもあります。神さまがお造り  
になったのだから、誰が何と言おうと良い作品なのだと自分  
にも言い聞かせます。そういうふうに分で言い聞かせたくなっ  
ているのかもしれない。

ただ、わたしはそのように記憶しても、この聖書の言葉を間違っ  
て読むことにはならないと思っています。わたしたちが、わたしが、  
神さまによって造られた自分を、何度も良い作品として確認する  
のは、そうしないと自分は生きて行くことができないと思うこと  
がしばしばあるからです。自分が神さまによって良く造られてい  
るものだというのを、いつも確信して生きるということ、それは、  
そんなに簡単なことではありません。ときに自分はちょっとばかり  
出来ると思うことはあっても、自分よりも出来のいい人がいくら  
でもまわりにいることに気がつきます。周りに目をやれば、ある  
いは今ですと外に出かけなくてもインターネット上でいろんな人  
たちが発信している情報や自己紹介の記事を目にすると、他の  
人たちは、自分よりもずっと悩みが少なく生きていると思えて  
羨ましく思ったり、妬ましく思うことがあります。そうすると、  
自分のあれを見ても、これを見ても、良い作品、神さまの完璧な  
作品であるとは到底思えない。そういうときに妬みや失望が生ま  
れる。けれど、「こんなわたしなんか」「どうせわたしなんか」とい  
うよう

な思いを抱いているときにも、「あなたは神に良く造られたものである」、聖書はそのように呼びかけます。ただし、自分を神さまの良い作品として認めるということは、こんな自分にも多少は良いところがあると、どこか長所を見つけて安心するということとは、ずいぶん違います。

わたしたちはこうして日曜日に教会に集まって礼拝をします。一番大きな理由は、イエスさまがこの日に甦られたからです。けれど、もうひとつの歴史的な起源を辿ると、ユダヤの人たちが守った安息日を受け継いでいます。神さまが六日の間、天地をお造りになるのに一所懸命にお働きになりまして、七日目にお休みになった。ですから七日目毎に安息日というのがやって来ます。キリスト教会はそれをひっくり返して安息日を最初に持ってきました。けれど、安息の日であることには変わりません。

この七日というのは完成を意味する数字です。神さまは

ご自分で完成なさった世界をご覧になって、「これはすばらしい」と深い満足を覚え、一日ゆっくりお休みになったという信仰が語られています。そして神さまは、このご自分が造られた世界を祝福なさいました。わたしたちが日曜日に集まって、ここで安息を楽しむのは、この神さまの祝福を受けるからだと思います。ただからだを休ませようと思うのでしたら、日曜日の朝、せつせと早く起きて教会に出かけることはありません。堅い椅子に座って、40分近くじっとしているのも相当の労働かもしれませぬ。けれどわたしたちは、ここで一緒にみ言葉を聞いて、一緒に讃美を歌いながら、この安息を楽しんでおられる神さまの祝福を受ける。この祝福を自分の祝福として受け入れる。それは、日曜日にここへ来るたびに、お互いに皆自分を「自分は良い者なのだ」と受け入れ直すことです。自分が丸ごと神さまに祝福を受けるのだという恵みを、ここで味わいます。教会というのは、他の誰かと比べて、多少はましな人間、いささか出来映えの良い神さまの作品が集まって、自己満足に浸るような世界ではありません。そうではなくて、むしろ、ど

う考えたって自分の良さを発見することができない、自分を良い作品とは認められないような、まさにそのような人間が集まって、いいえ違う、わたしたちは祝福されています、わたしは神さまの良い作品ですということを喜んで受け入れる。そしてお互いに「良かったね」と喜びあうのが教会です。そうでなかったら、教会に集まる意味はありません。

エフェソの信徒への手紙は 10 節に、「しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」と言います。この「歩むのです」という言葉は、2 節の「歩んでいました」と訳されていた言葉と同じです。散歩するぐらいにゆっくり歩くことのようにです。走っているのではなくて、コツコツ歩いて行きます。ですから 10 節の言葉も、毎日毎日を大切に生きていくことです。自分が良い作品として造られていることを受け入れるということは、自分の毎日毎日の生活を良い日として受け入れて生きていくということです。

更にここで「善い業」について語られます。この善さとは誰かが道徳的な、倫理的な物差しで計って良いか悪いか決めてくれるというようなものではありません。もう自分でよく分かっていることです。自分の良さを生きるということ、それが善い業です。この自分の値打ち、自分の良さに生きることできる人は、ただ自分で、そのしあわせを楽しんでいるわけにはいきません。他の人たちにも、どうしても知ってもらいたくなります。こういう生き方が一番大事なのだということを知らせたくなります。そのとき、相手に対して「あなたも神さまが造られた良い者」として受け入れるということ、その思いに生きるということです。その意味で、エフェソの信徒への手紙が、ただ「わたしは神の作品」「わたしは神に造られた」と単数で書かないで、「わたしたちは神に造られた良いもの」、「わたしたちは神さまの作品」とはっきり言います。

ただこの10節はもう少し丁寧にみると、ただ神さまがわたしたちをお造りになったということを単純に言っているので

はないようです。「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のためにキリスト・イエスにおいて造られたからです」。この言葉は、8節のところに「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」と書かれていますが、その言葉を繰り返すだけです。つまり、ここに語られている神さまの創造のわざというのは、キリスト・イエスによって今起こったものであり、キリスト・イエスによって与えられた救いそのものを意味します。

4節以下にはこう書かれています。「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし—あなたがたの救われたのは恵みによるのです—キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」。イエスさまがわたしたちのために死んでくださった。そして、わたしたちを甦らせてくださった。キリストご自



身と一緒に生きて、今生きながらすでに天にその座を占めるような生き方をさせてくださっているとさえ、エフェソの信徒への手紙は、言い切っています。

この10節は、キリストの恵みを知った人間が丸ごと救いとられていることを、喜んで受け入れる言葉です。ただそこで、もう一度考えなければならないことがあると思います。3節の言葉で言えば、わたしたちはかつて「肉の欲望の赴くまま」に生きていました。あるいは「生まれながら神の怒りを受けろべき者」でした。この時には、わたしたちは、神さまに造られた人間の良さというものを全く失っていました。けれど、ではもうそこで神さまから見放された人間だったのかというと、そうではありません。まさにそこで神さまの作品だったのです。神さまの作品であり続けたからこそ、それが「怒りを受けろべき者」に変わってしまっています。生まれた時から、「怒りを受けろる者」として生きて来てしまったということを悲しまざるを得なくなります。いったい「肉の欲望」とは何でしょう

か。「怒りを受けるべき者」とは何を意味するのでしょうか。

少し長い文章ですが、ある一人の牧師の文章を紹介いたします。「もうひとつ大事なことがあります。それは、神さまが造り主であることを信じれば、自分と神さまとが全くちがうものであることがわかることです。人間らしく生きるということから（わたしたちが）よく感じることは、人間らしくということが、人間の欲望の赴くままに欲望を伸ばすことになり、その結果、人間がまるで神さまのようになってしまうことです。それでは、人間らしくはならないで、別のものになってしまうのではないのでしょうか。わたしたちの国では、人間が神になることが、とてもやさしいように思えます。少し偉い人であれば、死んだ後に神として祭られますし、普通の人でも、死んだら仏として拝みます。このように、神と人間との区別がつきにくいことから、人間が人間らしくならないように思えます」。

これは急所をついた文章です。造り主である神さまを信

じるということは、神と人間とはまるっきり違うということ  
を、よく理解するようになるということです。けれど、このこ  
とは日本人だけではないと思います。エフェソの信徒への手紙  
が語っている「肉の欲望」というのも、ただ「肉欲」という言  
葉からわたしたちが想像するような、本能や動物に近いような  
欲望に人間が振り回されている、そのために地を這いずり回る  
ように生きるというようなことだけが、ここで語られているの  
ではないからです。そういうこともあるとは思いますが、むし  
ろそうではなくて、この文章の言葉で言えば、「神さまのよう  
になりたい」という欲望、これも「肉の欲望」です。神さまなん  
か無くても生きて行かれる人間なのだと思います、人間には  
そういう力があるのだといつの間にか思い始めるようになる。  
そういうところに、ここで語られている「生まれながら神の怒  
りを受けるべき者」の姿が現れてくるのです。

先ほど司会者が招きの言葉として読んでくださったイザ  
ヤ書の第44章でとても興味のあることは、「わたしの僕ヤコブ

よ わたしの選んだイスラエルよ、聞け」という言葉から始まるこの第44章が、「あなたは、僕なのだ」とイスラエルの人々に何度も語っていることです。「思い起こせ、ヤコブよ イスラエルよ、あなたはわたしの僕。わたしはあなたを形づくり、わたしの僕とした。イスラエルよ、わたしを忘れてはならない」(21節)。僕は神ではありません。神さまにお仕えする僕です。けれど、だからといって、そういう僕であるわたしたちを、神さまがどれだけ大事にしてくださり、その繰り返し犯す罪の中から、贖い取ってくださっていることであろうか。そう言っているのです。

このエフェソの信徒への手紙が「わたしたちは神に造られたものであり」と言いましたのも、今ここで、ただ新しく造られると言ったのではなくて、キリスト・イエスにあって、新しく造られたときに、わたしたち人間の本来の良さを回復すると言っています。人間はもともと良かったのです。救われて初めて良くなるのではないのです。もともと良かったのを、わた

したちが泥まみれにしていたのです。神さまがそれをもう一回きれいに洗ってくださったのです。だからこそ、日曜日は、ユダヤ人に倣って天地創造のみわざを讃美する日だけではなくて、この日、イエスさまが甦られたことを、お祝いする日でもあります。

もうひとつ最後に確認したいことがあります。それは、このエフェソの信徒への手紙で何度も繰り返して語られることは、神さまの恵みです。5節でも、「キリストと共に生かし」と書いたあとで、どうしても付け加えたくなくなったのだらうと思います。「あなたがたの救われたのは恵みによるのです」と書きました。これは、先ほどからの言葉の繋がりで言えば、「あなたがたが造られているのは、恵みによるのです」ということです。7節でも「わたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵み」と言います。8節でも「恵みにより、信仰によって」と言っています。そして10節では、「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださ

った善い業のためにキリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」と言いました。善い業を行って、毎日毎日を歩いて行くようにと、前もって準備してくださいました。これも恵みの業以外の何ものでもありません。この神の恵みに驚くことは、自分自身の存在に神の恵みを見出して、驚くことです。驚きは、奇跡を見つけたときに生まれます。自分自身の存在こそ神さまの奇跡だと、これを喜び、受け入れること、それが今、わたしたちに求められていることです。

もちろん、この恵みに驚き、感謝することは闘いを生みます。どうしてかと言えば、この世界も、自分自身も、神さまの良い作品とは言えないような、醜さ、愚かさ、過ちに満ちているからです。けれど、わたしたちはもはや、そういう目に見えるところの愚かさや、不幸や、絶望的な姿に躓いて、根本的な信仰の望みまで失うことはありません。神は私たちに良いものとして造ってくださいました。幼いなりに、年を重ねたまま

に、知恵あるままに、知恵無きままに、整ったままに、整うことを多少欠いたままに、皆、神さまに良く造られています。その神の恵みの証しとしての、主イエス・キリストを仰ぎ見ながら、キリストと共に、イエスさまと一緒に、日々生きていきたいと願います。お祈りいたします。

本当に、信仰の貧しい者であることを、愛の乏しい者であることを、恥じながらみ言葉の前に立ちます。自分を受け入れることができません。相手を受け入れることの難しさを感じます。この世界を受け入れることができません。そして、本当に怒ってしまいます。呟いてしまいます。批判に急ぐ心、自分も他者も批評ばかりしています。このような心から解き放たれて、あなたのみわざを受け入れる心に造り変えてください。この世界に、わたしたちと一緒に生きていながら、わたしたちの目から見えず、わたしたちが見ようもしない人々に、わたしたちの心が開かれ、手が伸ばされて行きますように。この教会を、どうかそうした思いに生きる集団として生かしてください

ますように。主のみ名によってお祈りいたします。 アーメン

**讃美歌** 讃美歌 21-227-4 (主の真理と)

**献 金** 讃美歌 21-65-2

**報 告** 週報の 3 頁を御覧ください。

**祈 禱** それぞれの場で黙禱をお願いします。

**主の祈り** 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

**祝 禱** 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と  
聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

**後 奏**

<礼拝終了>